

＜教育講演 (2)―7＞

神経内科に必要な臨床倫理学シリーズ
—Bad News Telling 難病の告知を中心に

萩野美恵子

(臨床神経 2012;52:877)

Key words : 臨床倫理, 難病告知, 悪い知らせ, 告知

神経内科領域は様々な倫理的課題に遭遇する機会が多い。個別性のある倫理的問題に均一の解答を求めることはできないが、考え方のプロセスは多くのばあい共有できる。基本的な考え方を学ぶことは臨床場面で困惑したときに、物事の整理に役立ち、よりよい医療の提供につながるとともに、医療者自身も傷つかずに済む。とくに若い神経内科医にむけて、臨床現場に役立つ倫理的課題を取り上げる企画を持つことになった。今回は「Bad news telling 難病の告知を中心に」として、どのような点に留意しておこなうべきかという点について、他分野の知見も参考にしながら解説を試みる。

20～30年前は予後の悪い告知を本人に直接することは少なかったが、その時代の患者のジレンマもあった。最近では逆にあまりに淡々と告知されて傷つく患者も多い。日本の医療界はこのような課題をとりあげて教育することがなかったため、医師もどのように処したらよいのか、自信を持って臨んでいるわけではないだろう。ひとたび主治医になると他の医療者の告知の場面に立ち会うことは極端に減るため、たかだか5～6年の経験に基づいてスタイルができあがっていくこと

になっているのが現状である。

Bernard Loはその名著 Resolving Ethical Dilemmas A Guide for Clinicians で困難な情報を開示する(告知)するときに気をつけることは、1. 情報開示にともなうジレンマを予測する、2. 患者が何を望んでいるかを見極める、3. 家族の心配ごとを聞き出す、4. 診断を伝えるか否かではなく、どのようにして診断を伝えるかに焦点を当てる、5. 情報開示しなかった際におこりうることに備える、と述べている。

本講演では、考えの手立てとして、①最初に誰に伝えるべきか：本人・本人と家族同時・家族からといろいろな方法がとられているが、夫々のメリット・デメリットはなにか、②最初にどこまで伝えるべきか：重篤な予後につき始めて話すときにどこまで伝えるべきか、現代のインターネット時代を踏まえての考察、③ Bad news telling であるからこそ気をつけたことはなにか、について参加者を交えて議論したい。

※本論文に関連し、開示すべきCOI状態にある企業、組織、団体はいずれも有りません。

Abstract

Series of clinical ethics necessary for neurological medicine
—“Bad news telling” with a focus on notification of intractable diseases

Mieko Ogino

Kitasato University, School of Medicine, Department of Neurology

(Clin Neurol 2012;52:877)

Key words: clinical ethics, notification of intractable disease, Bad News Telling, Breaking News